

**JLTA Newsletter No. 50**  
**日本言語テスト学会**  
**The Japan Language Testing Association**

JLTA Newsletter No. 50 発行代表者: 渡部良典 2021年(令和3年)5月1日発行

発行所: 日本言語テスト学会 (JLTA) 事務局

〒036-8560 青森県弘前市文京町1

弘前大学教育推進機構教養教育開発実践センター

横内裕一郎研究室 TEL: 0172-36-2111(代表) e-mail: u16yoko@gmail.com URL: <http://jlta.ac>



\*\*\*\*\*

**大友賢二先生の遺産**

**渡部 良典 (上智大学)**

令和3年(2021年)1月19日、言語テスト学会の生みの親、育ての親大友賢二先生が逝去された。先生は言語テスト研究の先駆者として永年にわたり言語教育の理論と実践に大きく貢献された。晩年になっても先生の探求心は衰えることがなく、その真摯な姿勢に私たちは支えられてきたのである。

大友先生が英語教育関係でまとめた業績を世に出されたのは『英語の測定と評価』(ELEC) —David P. Harris 著 *Testing English as a Second Language* の翻訳といってよいであろう。原著は1969年出版、詳細な解説の付された大友訳が出版されたのは1972年である。Robert Lado の *Language Testing* (1961年出版) の翻訳が大修館書店から出版されたのが1971年だからほぼ同時期であるといってよい。当時英語教育に携わる教員、研究者の中でこの分野に関心を持っていた人はほとんどいなかったであろう。実証的な第二言語習得研究は行われていても数は限られており、言語学プロパーの研究者からすればせいぜい応用の応用に過ぎないように見えたに違いない。そのような環境において言語能力の測定や言語テストの質の科学的検証がひとつの重要な研究分野であることを示した両書の意義は計り知れない。

大友先生の探求はその後も留まることなく、言語能力の科学的な検証を深化すべく研究を続けられた。そして『項目応答理論』(大修館書店)として結実した。我が国でこの本を読まずにIRTを理解したという言語教育関係の研究者は皆無といってもよいであろう。古代ギリシアの哲学者・作家の年齢を推定する際、彼あるいは彼女が最も充実した著作を書いた年齢を40歳と仮定するのだそうである。確かに、体力や家庭の事情等々からして大きな仕事を完成させる一応の目安として現代においても納得できる年齢である。しかし、本書が出版されたのは1996年、先生が筑波大学を退官された年である。発売後30年近くたった今でも研究者に読み継がれているこの名著は4半世紀以上にもわたる研鑽を積んでこられたその成果である。今後さらに30年否それ以上に未永く読み継がれてゆくに違いない。

大友先生は、ともに学び合い研究を通して人と人とのつながりをつくることの達人であられた。さまざまな研究課題に関心を示され、年齢で分け隔てをすることなく知識と能力を尊重し、そして優秀な研究者を育てられた。それは前掲書のあとがきに、愛弟子であられる中村洋一、さらに法月健、服部環の諸氏のお名前をあげて謝意を示されていることから明らかである。また世界中の研究者とも同等の立場で切磋琢磨の機会を求められた。1999年にアジアで初めて開催されたLTRCは先生の止まぬ自彊の賜物である。

先生の探求心は晩年になられて益々深みを増しているように見受けられた。研究会等でお目にかかりお話しを伺うたびにその真摯な姿勢に圧倒されたものである。それは単に内在的な興味関心からだけでなく、テスト・評価の研究を普及することに対する明確な使命感をお持ちであったことに起因していたように思われる。前掲書のまえがきには、「大学や大学院で言語教育に関連した教職を希望している学生、また、現在、中学校、高等学校、または大学で外国語教育に携わっておられる方々、そのほか言語教育に携わっているすべての方々が読者であることを念頭に…理数系ではない筆者が、理数系ではない読者のために書き記したものです」と書かれているが、この文言からも啓蒙者としての姿が見て取れる。

『東北学院英学史年報—第41号』が封書で手元に届いたのはちょうど今年の今頃である。そこには先生の手書が添えられており、これまで出会われた一人ひとりに宛てられたメッセージとして読み取ることができた。「陽春の候 皆様にはますますご清祥のこととお慶び申し上げます。私のすぎこしかたをのべております。…もうこれが最後の小論であろうと思います。お陰様をもちまして皆様にお会い出来まし

たことをよろこびに思います。… 暮春の哀愁にひたりながら…。」

先生から頂いた学恩に感謝しつつ、遺産として継承発展させてゆくことが私たちに託された課題である。先生がいつまでも見守りながら、応援をしてくださっていることを信じつつ。

**Reports on  
The 23<sup>rd</sup> Annual Conference  
of JLTA  
Dec. 12 (Sat), 2020**

**Online (Zoom)**

**Theme: Language Testing: Past,  
Present and Future**

2020年度の全国大会は新型コロナウイルス感染拡大に伴い、オンラインで開催された。基調講演やシンポジウムは開催されなかったが、内容の深い研究発表や活発な質疑応答がなされ、実りのある大会となった。プログラムは以下のとおりである：

12:50 – 13:00 開会行事・会長挨拶

13:05 – 14:45 研究発表 I・II・III

14:45 – 15:00 休憩

15:00 – 16:05 研究発表 IV・賛助会員発表 (V・VI)

16:10 – 閉会行事 & JLTA 最優秀論文賞授与式

16:30 – 16:50 JLTA 総会 議長選出 報告

## 大会の印象

清水 裕子 (立命館大学)

初めてのオンラインでの開催となった第 23 回 JLTA 全国研究大会は、12 月 12 日 (土) に無事終了いたしました。年に一度の大会は、例年、開催場所や日程の関係で参加が叶わない方もいらっしゃると思いますが、今回はオンラインのため、参加しやすかったと感じられた方もいらっしゃるかと思います。私は、実家からアクセスしたため、商店街の車の音が入り込まないか、やたら膝に乗りたがるペットの犬が邪魔をしないかと気にしながらも、発表を聴かせていただきました。司会を担当してくださった先生方の手際の良さに感激しながら、二つの発表会場を行き来し、実施方法や分析方法を含めた今後の言語テストのあり方や教育現場との関わりを考える上で、何か面白いことが展開していくのではないかとワクワクする研究に出会うことができました。〈ワクワク〉する期待感には、〈ドキドキ〉する不安感もついて参ります。その不安の一因となるのは、もしかしたら日本のテスト風土や教育風土ではないかと、渡部良典会長の開会のあいさつから感じとったのは私だけではないかもしれません。テストングの領域がもっと認知され、言語テストや心理測定の研究者の声が広く届いていくことを願ってやみません。

ところで、JLTA は、いつもなにかほっとさせてくれるコミュニティだと感じております。今回、参加者が対面で接することができませんでしたが、発表でのやり取りやチャットに届く質問やメッセージの中に温かさが感じられました。この温かさを大切にしながら、新しい一歩を踏み出していかなければいけないと思いますが、さて、その一歩は、どのようになるのでしょうか。

Language Testing: Past, Present and Future。2020 年のコロナ禍で、今回が最初で最後のオンライン開催の全国大会となるのでしょうか。あるいはひとつの新たな形態として、未来に向かって〈ワクワク・ドキドキ〉を展開していくのでしょうか。楽しみにすることにいたします。

最後になりましたが、発表者の皆様、ご支援をいただいた団体の皆様、そして今回のオンライン会議システムによる大会を可能にして下さった委員の皆様に感謝とお礼を申し上げます。ありがとうございました。

### Report on The 51st JLTA Research Seminar

Nov. 22 (Sun)

於：オンライン

「英語スピーキング評価における採点方法の  
改善 (Part 1)」

報告者 馬場 正太郎  
(東京外語大学大学院)

第 51 回 JLTA 研究例会では、小泉利恵先生 (順天堂大学) を代表者とする科研「高校の英語授業内スピーキング評価における『信頼性確保のための採点指針』の作成」(基盤研究(C) 20K00894) の成果発表と、海外の大規模テストや教室内におけるスピーキング評価の実践についての講演が行われた。

まず前半の部では、小泉先生より、科研プロジェクトの成果発表が行われた。発表の中では、採

点者である教員が評価に与える影響に焦点が当てられ、スピーキング評価に使用するタスクの設定の仕方やルーブリックの作り方について解説していただき、採点者の信頼性（採点者間、採点者内の両方を含む）を高めるための採点者トレーニングに関する研究結果について報告がなされた。

後半の部では、海外の研究者による講演が行われた。まず、Jason Fan 先生（University of Melbourne, Australia）からは、中国で行われている4種類の大規模テスト（CET-SET, TEM, NMET-Shanghai Version, ETIC）の概要と、各テストで実施される英語スピーキング評価の詳細についてご講演いただいた。

続く Jin Yan 先生（Shanghai Jiao Tong University, China）からは、中国の大規模テスト CET-SET について取り上げていただき、CET-SET の変遷やテスト設計思想、評価規準や採点方法、採点者の募集やトレーニングの方法についてご講演いただいた。

その後、Martin East 先生（University of Auckland, New Zealand）からは、ニュージーランドの事例を取り上げていただき、大規模テスト The National Certificate of Educational Achievement (NCEA) の概要や、生徒間の活動を継続的に評価し、教室内スピーキング評価と NCEA との接続を図るための実践についてご講演いただいた。

最後に、Chris Davison 先生（University of New South Wales, Australia）からは、香港とオーストラリアにおける採点者トレーニングの実践についてご講演いただき、採点者トレーニングのためのツール紹介や、ツールの基盤にある社会文化理論について解説していただいた。

後半の部の終了後、Zoom のブレイクアウトセッションが設けられ、グループに分かれて講演者と参加者の間で議論がなされた。その後、全体で質疑応答がなされ、自動採点アルゴリズムの公開の是非や、学校で行われる評価と共通テスト（standardized test）のバランス、評価方法や試験制度を変える際に教員を含む利害関係者が考慮すべき点などについて議論がなされた。

本研究例会は、初のオンラインの開催であったにもかかわらず、96名の方にご参加いただいた。対面形式ではなかなか質疑に参加できない方でも、ブレイクアウトルームを設けていただくことで、参加者が先生方と容易に議論を交わすことができるのが、オンライン形式のメリットだと感じた。時差があったにもかかわらずご講演いただいた先生方、オンライン配信をサポートいただいた運営委員の方々、そして質疑を盛り上げてくださった参加者の皆様に御礼申し上げる。

**Report on  
The 52nd JLTA Research  
Seminar**

**Feb. 14 (Sun)**

**於：オンライン**

**「英語スピーキング評価における採点方法の  
改善 (Part 2)」**

**報告者 土平 泰子（聖徳大学）**

この会は2月14日、小泉利恵先生の科研プロジェクト第2回例会とJLTAの共催として、参

加者 135 名の中、オンラインで行われた。副会長の中村洋一先生の開会の辞の後、小泉利恵先生から趣旨について説明があり、続いて3つの講演があった。

1つ目は University of Bedfordshire の井上千尋先生による「大規模スピーキングテストにおける採点の運用と課題」であった。井上先生は、大規模スピーキングテストと考えられる4つのテスト (IELTS, ケンブリッジ英検, TOEFL iBT, Versant) について概要、タスク、評価観点などの特徴を詳細に説明された。また、それぞれについて観点別スコアやそれ以上の具体的なフィードバックが受験者にあまり返されることがないことを指摘され、今回改めてそうだなあと考えさせられた。この理由として井上先生は、外部機関に語学力を証明するのが目的なのでそうした需要や期待が低いことや、そのようなフィードバックがあっても受験者の背景や学習環境の幅広さから、一般的なフィードバックになってしまうことなどを挙げられた。大規模スピーキングテストの制約や課題を考えると、校内スピーキングテストの方が幅の狭いルーブリックを使用出来たり、タスクに柔軟性を持たせたり、受験者を手助けできたりなど親切であることも述べられていて、まさにその通りだと思った。自分の生徒の状況などでは、大規模スピーキングテストは何となく敷居が高いと思っていたが、その理由はこのような点からだったのかもしれない。就職などのことを考えると大規模スピーキングテストの対策も大事ではあるが、学習者にやさしいテストの方についても重視していかなければならないと感じた。

2つ目は信州大学の酒井英樹先生による「信州英語プロジェクトにおける教室内スピーキングテストと採点者信頼性」であった。信州英語プロジェクトは新学習指導要領に向けた英語教育の抜本的

な改善に資することを目的としたもので、CEFR—J の枠組みを共通参照枠として5領域型「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標の作成・改善、話すことや書くことそして領域統合型の指導・評価方法の開発が主な内容である。今回は特にスピーキングテストの内容や評価方法、信頼性を高めるための工夫についてお話があった。研究者によってプロフェッショナルに進められた大規模なプロジェクトであるが、随所に現場や中高生の実情を考えて実施を可能にするための工夫が見られた。

3つ目は筑波大学の平井明代先生と弘前大学の横内裕一郎先生による「教室内技能統合型スピーキングテストにおけるルーブリックと採点」であった。まず平井先生より、技能統合型スピーキング評価の有用性、信頼性を高めるための方法（採点者数の増、タスク回数の増、評価者訓練、匿名でのピア評価、採点観点の担当分割、ルーブリックの工夫、テクノロジーの活用）についてお話があった。後半は横内先生より口頭要約課題を例にしたお話があり、Hirai & Koizumi (2008) の EBB スケールを用いた分析が紹介され、内容の評価基準設計や実際の評価時の注意点が述べられた。横内先生によると口頭要約課題にはある程度の能力が必要であり、内容については踏み込んで評価するため、評価基準をしっかりと設計する必要があるとのことであった。

オンライン実施ではあったが後日動画や資料も公開され、繰り返し見直すことも可能で理解を高めるのに役立った。コロナ禍ではあるがこのような開催形式の利点を感じた。

## 書評 Article Reviews

### 『英語教育における自動採点－現状と課題』

石井雄隆・近藤悠介(編)

2020年 ひつじ書房

本書は、英語教育、とりわけライティングを中心とした産出技能の評価や採点で注目されている自動採点について、その歴史や最新の研究などを網羅している。機械による自動採点は、英語教育の分野だけで発展している分野ではない。理化学研究所の革新知能統合研究センターにある自然言語処理チームや教育関連の会社 (e.g., Z会グループ) など、様々な研究者・グループなどが参入している分野でもある。分野の発展が目まぐるしいため、最新の研究に追いつくことが難しいが、本書は研究の流れを掴むことができる書籍だと言えるだろう。

本書は7章で構成されており、各章を読むことで自動採点の全体像を理解することができる。第1章では、自動採点に関する研究を深掘りする準備として、自動採点分野における基本的な情報が網羅されている。例えば、自動採点研究が注目される理由や社会的背景、分野における問題点 (e.g., 評価の難しさ)、自動採点研究の歴史などが解説されている。第2章では、自動採点と言語テストを結びつけ、自動採点の有用性と課題点が説明されている。自動ではあるものの、テスト受験者が産出したパフォーマンスを採点していることには変わりない。よって、言語テストの裏側に

ある構成概念やテストの目的なども当然、考える必要がある。

第2章では、Bachman and Palmer (2010) における言語テスト開発の理論を援用し、言語テストと自動採点の架け橋的な役割を果たしていると言える。第3章では、ライティング評価とパフォーマンスにおける言語的指標 (e.g., 複雑性や正確性) の関係性を明らかにするために、メタ分析の結果が詳細に記述されている。言語的な特徴とライティング熟達度の関連性や予測の程度を調査する研究は、非常に多く行われてきている。大量にある研究の結果を統合したり、これらの研究で必要な要素を見出すメタ分析は、分野の発展に大きく寄与する。

第4章では、学習者コーパスと自動採点のつながりが詳細に検討されている。闇雲に特徴量を選択・使用したのでは、精度の高い評価を行うことは困難である。自動採点の精度を高めるには、予測に適した特徴量が必要である。異なる熟達度を持った学習者が作成した英作文をコーパス化し分析を行うことで、各段階の学習者の言語的特徴を定量的に記述することができる。学習者コーパス研究は自動採点で精度の高い評価を行うための基礎と言える。

第5章では、深層学習に基づくライティングパフォーマンスの自動採点について、その概要が紹介されている。英語教育の研究者には、近年他分野でその有用性が注目されている深層学習の仕組みや基礎知識などについて知らない人も多いと思われる。そのような読者であっても第5章を読むことで、深層学習を理解するうえで必要な前提知識や仕組みの概要を理解することができるだろう。

これまでの章では、自動採点研究の歴史や最新の研究、深層学習の仕組みなど、研究の色彩

が強かった。一方で第 6 章では、自動採点を教室での指導に持ち込むために参考となる研究が紹介されている。自動採点の中でも、英作文内にある誤りに対する訂正フィードバック (corrective feedback: CF) に関する研究の動向や、現在運用されている自動採点のツール (e.g., Criterion, PEG Writing) の精度に関する研究が詳細に解説されている。多くの学生の英作文を人手で採点したり CF を与えたりすることは、非常に重要な業務であるが骨が折れる作業である。そのような負担を抱えている教員にとって、参考となる章だろう。

最終章である第 7 章では、自動採点研究の研究について、現在の技術水準や今後の研究の方向性・課題について解説されている。TOEIC のライティングテストが用いられた研究や、東京大学の 2 次試験における世界史の記述式問題を用いた研究、国語の記述問題を用いた研究など、英語教育にとどまらず、様々な分野での研究が紹介されている。手書きによる文字認識など、まだまだ課題点はあるものの、自動採点の発展は今後も目を離すことができない。

本書は、英語教育に従事する研究者が、当該分野に関する知識を踏める第一歩になるだろう。また、大学院生が自動採点に関する研究を始め際に読むべき書籍として、まさにうってつけの本と言える。書籍の内容と関連する分野に関する博士論文を執筆している私にとっても、非常に参考となる書籍であった。

**評者 岡 秀亮**  
(筑波大学大学院)

## JLTA 講師派遣 実施報告書 (派遣先より)

**報告者 中部地区英語教育学会三重地区**  
(愛知学院大学) 藤田 賢

研修名：「授業内で行うやり取り力の評価」  
講師名：小泉利恵氏 (順天堂大学)  
実施日：2020 年 12 月 26 日 (木)  
14:00~16:40  
開催地：オンライン開催

中部地区英語教育学会三重地区 12 月例会、特別講演会 (オンライン開催) がありました。順天堂大学の小泉利恵先生をお迎えし、「授業内で行うやり取り力の評価」というテーマでお話をいただきました。当日は、学生院生、小中高の教員、教育委員会より 30 名を超える参加者があり、活発な質疑がありました。

小泉先生は、授業外実施・後日採点パタンのスピーキングテストに対し、授業内実施・授業内採点のメリットと形成的なスピーキング指導の充実の大切さを強調されました。その上で、様々なスピーキングのパフォーマンスと評価についての方法や課題を整理していただきました。

参加者からの質問が多数あり、小泉先生は、それらの質問の 1 つ 1 つに、丁寧に詳しく答えていただきました。参加者からは、よかったという声が多く、質問・意見が活発に次々と出され刺激的な会となりました。三重では、今後、小泉先生の講演を参考にして、スピーキング指導の実践研究を進める予定にしています。

**JLTA 事務局より連絡**  
**Messages from JLTA Secretariat**

JLTA の活動にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。ご質問・ご意見等ございましたらお寄せください。

- (1) 今号の JLTA Newsletter 発行遅延は事務局の作業が遅れたためです。発行が遅れたこと、深くお詫び申し上げます。
- (2) 2021 年度の全国研究大会は、オンラインで 9 月 4 日（土）—5 日（日）に開催予定です。大会テーマ、基調講演者、並びに発表申し込みについては今後学会 HP、メール、Twitter 等を通じてご連絡差し上げます。参加申込みの方法は後日改めて 7 月末～8 月初旬を目処に案内する予定です。なお、昨年度は緊急対応であったため、参加費無料とさせていただきますが、今年度については、参加費は PayPal を使用して徴収する計画を立てております。こちらも詳細が決まりましたらお知らせする予定です。最新情報は、以下からご確認ください。  
[http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=18](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=18)  
Twitter: @JLTA\_official
- (3) 2020 年 11 月 22 日（日）及び 2021 年 2 月 14 日に第 51 回ならびに 52 回 JLTA 研究例会が、小泉利恵科研プロジェクト例会と共催の形でオンライン形式（Zoom 使用）にて開催されました。例会のテーマはそれぞれ、英語スピーキング評価における採点方法の改善（Part 1）・（Part 2）で、前者は英語で、後者は日本語で開催されました。いずれも、80 名程度の方にご参加くださいました（事前登録者はそれぞれ 96 名、135 名）。例会発表

時のスライドは

[http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=21](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=21)

でご参照いただけます。

- (4) 『**日本語テスト学会誌**』第 24 号は今冬発行予定です。これまでの学会誌の論文等は、J-STAGE (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal>) にて公開されています。また、23 号については近日中に一般公開する予定です。『**日本語テスト学会誌**』は、狭義のテストングに関するものだけでなく、広く評価に関する論文を募集しています。教育実践やプログラム評価に関するものなど、評価全般に関わる実験・知見を含みますので、どうぞふるってご応募ください。

日本語テスト学会では、2019 年度より「**オンライン投稿審査システム**」を導入しました。このシステムは、2014 年度から学会業務の一部を委託してきた国際文献社が持つもので、投稿と査読の過程がオンライン上に記録されます。さらに、学会誌の一層の質の向上を目指して、既に出版された論文のデータベースを使った投稿論文の剽窃の確認や、著者による論文の匿名化の再確認もシステムの中で行います。2021 年度もこのシステムを使って投稿を受け付けます。詳細は、次の通りです。

#### オンライン投稿審査システムに関する詳細

##### 1. システムのウェブサイト

<https://iap-jp.org/jlta/journal/login>

##### 2. 投稿期間

2021 年 4 月 7 日～2021 年 5 月 7 日

この期間しか投稿ができませんのでご注意ください。お知らせが遅くなり申し訳ありません。締

め切りまで数日となっておりますので、投稿をお考えの方は、お急ぎください。

### 3. 学会誌執筆要領・テンプレート

本システムの導入等により一部変更があります。最新の執筆要領やテンプレートをご参照ください。

[http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=62](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=62)

### 4. 問い合わせ先

日本言語テスト学会誌 編集事務局  
jlta-edit@bunken.co.jp

- (5) **JLTA 研修講師派遣事業**が 2017 年度から始まりました。本事業は、テスト利用・作成に関わる研修を行う機関・団体に JLTA より講師派遣を行うものです。JLTA 研修講師派遣委員会を中心に進めましたところ、2020 年度は 1 件依頼があり、中部地区英語教育学会三重地区への派遣を行いました。会員の皆様におかれましては、言語テストにご興味のある方々へご周知くださいますようお願いいたします。

ウェブサイト：<http://jlta2016.sakura.ne.jp/?p=929>

- (6) 本学会ウェブサイトには、Web 公開委員会が公開を進めてくださった、**チュートリアルとワークショップ・ビデオ**があります。どうぞ活用ください。

## WORKSHOP VIDEO/WEB TUTORIAL

チュートリアル (Tutorial, 日本語)

・「よい」テストの条件 (What is a 'good' test?: validity, reliability, and practicality)

- ・テストの構成概念 (The concept of test constructs)
- ・テスト細目 (Test Specification)
- ・リーディングテスト (Testing Reading-6 basic test formats-)
- ・リスニングテスト (Testing Listening)
- ・ライティングテスト (Testing Writing)
- ・スピーキングテスト (Testing Speaking)
- ・語彙・文法テスト (Testing Vocabulary & Grammar)
- ・測定の標準誤差 (Standard Errors of Measurement)
- ・効果量とは? (What is the 'Effect Size'?)
- ・学習に役立つテスト結果の報告 (Test result reporting to enhance learning)
- ・古典的テスト理論 (Classical Test Theory)
- ・確認的因子分析 (Confirmatory Factor Analysis)
- ・メタ分析 (Meta-Analysis)
- ・質的方法 (Qualitative Methods)

## ワークショップ・ビデオ (主に日本語)

2014

- ・Workshop 1 - CAT の基本的な考え方 (スライド)
- ・Workshop 2 - J-CAT (スライド 1, スライド 2, スライド 3)

2015

- ・Workshop 1 - テストデータ分析入門 (in English)
- ・Workshop 2-1 - 生徒の力を伸ばす定期テストの作り方—妥当性と信頼性に留

意して (スライド) ・Workshop 2-2 -  
How to Develop Tests that  
Improve Students' English  
Proficiency (スライド)

2016

- ・Workshop 1-1 初めて学ぶ効果量－  
入門編 (スライド)
- ・Workshop 1-2 初めて学ぶ効果量－  
理論編 (スライド)
- ・Workshop 1-3 初めて学ぶ効果量－  
実践編 (スライド)

2017

- ・Workshop - テキストマイニングを使った  
自由記述式アンケートの分析

2019

- ・Workshop - ベイズ統計とその外国語  
教育研究への応用 (前半)
- ・Workshop - ベイズ統計とその外国語  
教育研究への応用 (後半)
- ・配布資料

#### (7) JLTA 最優秀論文賞

2020 年度の最優秀論文賞は以下の通りに  
決定しました。

著者：島田めぐみ・澁川晶・孫媛・保坂敏  
子・谷部弘子 (敬称略)

タイトル：日本語聴解認知診断テストの開発  
を目指したアトリビュートとテストの分析

該当ページ： JLTA Journal, 23, pp.  
37-56

おめでとうございます。受賞者からのコメントは  
次号の JLTA Newsletter にてお届けする予  
定です。

#### (8) その他

- 会員情報や会費納入状況の確認・修正が  
できる「マイページ ( [https://www.  
bunken.org/jlta/mypage/Login](https://www.bunken.org/jlta/mypage/Login) ) 」はご  
利用いただいておりますでしょうか。ログインに必  
要な会員番号やパスワードを紛失された方は  
以下からお問い合わせください  
( [https://www.bunken.org/jlta/  
mypage/Contact](https://www.bunken.org/jlta/<br/>mypage/Contact) ) 。マイページ内の会員  
向けページにおいて、ジャーナル・ニューズレター  
等の掲載があります。
- 所属や書類発送先など登録情報に変更が  
ある場合、マイページでの登録情報の変更を 3  
月末までをお願いいたします。学生会員の方  
には、毎年学生証のコピーをご提出いただい  
ています。
- 2019・2020 度の会費振込について、これ  
からの方は早急によろしくをお願いいたします。  
2019 年度分のお支払いがない場合には、2021 年 4 月より送付物の発送や電子メ  
ールの配信がなくなり、マイページの使用もでき  
なくなります。
- 本会の退会を希望される方は、事務局  
( [jlta-post@bunken.co.jp](mailto:jlta-post@bunken.co.jp) ) へご連絡を  
お願いいたします。

文責：

JLTA 事務局長 横内裕一郎 (弘前大学)

JLTA 事務局次長 小泉利恵 (清泉女子大学)

藤田亮子 (順天堂大学)

日本語テスト学会 (JLTA) 公式

Twitter アカウント: @JLTA\_official

[https://twitter.com/JLTA\\_official](https://twitter.com/JLTA_official)

#### Messages from the Secretariat

We are thankful for your support of and  
commitment to JLTA's activities. Please

send us any comments or inquiries you have. Also, please see our English website for more details:

[http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=599](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=599)

(1) We apologize for not sending the *JLTA Newsletter* issue sooner. This is due to delays in the secretariat's work.

(2) **The 24th JLTA Annual Conference** is scheduled to be held online September 4 (Sat) – 5 (Sun). The conference's theme, keynote speakers, and presentation registration will be announced via the JLTA website, e-mail, and Twitter. The attendee registration procedure will be announced later, around the end of July or the beginning of August. We plan to use PayPal to collect all registration fees. We will advise when details are finalized. The latest information can be found at [http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=18](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=18) or on the official Twitter account (@JLTA\_official).

(3) The 51st and 52nd JLTA meetings were held online (via Zoom) on Sunday, November 22, 2020, and February 14, 2021, respectively, in collaboration with the Rie Koizumi's Kaken Project meetings. The meetings' themes were "Improving scoring methods in English speaking assessment" (Part 1) and (Part 2).

The former was held in English and the latter in Japanese. Both sessions were attended by about 80 people, although 96 and 135 people had registered in advance, respectively. To review the slides used in both meetings, see

[http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=21](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=21)

(4) **The JLTA Journal (vol. 23)** was published and sent to members' registered postal addresses last January. Previous volumes were uploaded onto J-STAGE (<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jltajournal>). The latest volume (vol. 23) will be added very soon.

**The JLTA Journal invites various types of contributions that include studies related to evaluation in a broader sense,** such as classroom-based practice and program assessment that dealing with issues and topics on testing and assessment.

(5) We introduced an "Online Submission and Review System" from the academic year 2019. This system is organized by the International Academic Publishing Co., Ltd., which JLTA has commissioned part of JLTA's administrative work since 2014. Within this system, all submission and review processes will be recorded online. Furthermore, to improve the

JLTA Journal's quality, submitted manuscripts will be checked for plagiarism using a database of published articles and for anonymity using human resources.

### **Details about JLTA Online Submission and Review System**

#### 1. Website

<https://iap-jp.org/jlta/journal/login>

#### 2. Submission period in 2021

We only accept submissions during the following period:  
April 7, 2021 to May 7, 2021

We apologize for the late notice. The submission deadline is fast approaching, so if you are considering submission, please respond quickly.

#### 3. The Guidelines for Contributors and Templates

The Guidelines for Contributors to the *JLTA Journal* and Templates have been revised due to the introduction of the system and other changes. Please see and follow the latest guidelines and templates before submission, which are located at:  
[http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page\\_id=62](http://jlta2016.sakura.ne.jp/?page_id=62) for details.

#### 4. Contact information of the JLTA editing office: [jlta-edit@bunken.co.jp](mailto:jlta-edit@bunken.co.jp)

(6) We have been working on the **JLTA Training Lecturer Dispatch project** since 2017, which aims to send a lecturer from JLTA to institutions and organizations wanting to hold a training session or meeting on test development and use. Thanks to the efforts of the JLTA Training Lecturer Dispatch Committee, one academic society used this system to dispatch a lecturer to its meeting during the 2020 academic year. Please feel free to convey this information to those who may be interested.

Website:

<http://jlta2016.sakura.ne.jp/?p=929>

(7) JLTA determines a winner for **the JLTA Best Paper award** chosen from papers published in the latest issue of the *JLTA Journal*. The award is conferred at the annual conference in the following year. We are pleased to announce the award recipient for the 2020 JLTA Best Paper Award.

**Authors:** Megumi SHIMADA, Aki SHIBUKAWA, Yuan SUN, Toshiko HOSAKA, and Hiroko YABE.

**Title:** Analysis of Attributes and Items for Developing a Cognitive Diagnostic Japanese Listening Test

**Location:** JLTA Journal, vol. 23, pp. 37–56

#### **(8) Other information**

● Have you visited the "My Page" site (<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Login>), where you can check and

modify your membership information and check your yearly membership fee payment status? Please contact us (<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Contact>) if you need your membership number and password, which are necessary details for the login. You can access recent *JLTA Journals*, previous newsletters, and other materials specifically for members on the "My Page" site.

- If you have changes in your affiliation, address, and other information, please update your registered information on "My Page" by the end of March. We annually send student members a message asking them to submit a copy of a student certificate.

- If you have not yet paid the yearly membership fee for 2019 and 2020, please do so at your earliest convenience. If you do not pay the fee for 2019, you will receive no shipment or email message from JLTA and will not be able to use the "My Page" site after April 2021.

- If you plan to leave JLTA, please let us know by sending a message to [jlta-post@bunken.co.jp](mailto:jlta-post@bunken.co.jp)

**JLTA Secretary General**  
**Yuichiro YOKOUCHI**

**(Hirosaki University)**

**JLTA Vice Secretary General**

**Rie KOIZUMI (Seisen University)**

**Ryoko Fujita (Juntendo University)**

JLTA Official Twitter account:

@JLTA\_official

[https://twitter.com/JLTA\\_official](https://twitter.com/JLTA_official)

<編集後記>

初のオンライン開催となった大会や例会も、皆様のご協力のもと、大変質の高い内容となりました。原稿をご執筆下さった先生方にも感謝申し上げます。未だ収束が見込めませんが、コンビニのレジで通常の距離を保って並べる日が来るまで、皆様くれぐれも健康にご留意のうえお過ごしください。(KM)

次のような原稿を募集しておりますのでどうぞお寄せください。1) 海外学会報告, 2) 書評, 3) 研究ノート, 4) 意見, またその他当学会員の興味関心に沿うもの。



日本言語テスト学会事務局

〒036-8560 青森県弘前市文京町1

弘前大学教育推進機構教養教育開発実践センター

横内裕一郎研究室(郵送時には必ず研究室名を明記してください)

TEL: 0172-36-2111(代表)

e-mail: [u16yoko@gmail.com](mailto:u16yoko@gmail.com)

URL: <http://jlta.ac>

編集： 広報委員会  
委員長 宮崎啓 (東海大学)  
副委員長 古賀功 (龍谷大学)

委員  
笠原究 (北海道教育大学旭川校)  
土平泰子 (聖徳大学)  
長沼君主 (東海大学)